

戦後日本における男女共学制と ジェンダー平等に関する一考察 —福岡県立高等学校の事例を中心に—

木村 浩則*

戦後教育改革の柱の一つであった男女共学化は、日本の高校生あるいは日本人のジェンダー平等意識の形成にどのような役割を果たしたのだろうか。これまでの先行研究では、その評価は必ずしも一致しておらず、共学化はむしろ既存のジェンダー秩序の再生産に寄与したという指摘さえ存在する。本稿では、福岡県のいくつかの学校の事例に焦点を当て、資料調査ならびに卒業生へのインタビュー調査をもとに、共学化当時の高校生の反応や教師の対応等を明らかにするとともに、それをもとに、戦後の男女共学制が、日本人のジェンダー平等意識の形成に与えた影響をあらためて検討した。その結果、明らかになったのは、共学という制度空間の中で生じた男女生徒たちの戸惑いや不安、(対立や葛藤を含む)対話的關係の中に、新たなジェンダー秩序編成への可能性を垣間見ることができるということである。

Key Words : ジェンダー, 共学制, 戦後教育, 高等学校

はじめに

本稿の課題は、戦後の高等学校において進められた男女共学化のプロセスとそれが生徒のジェンダー意識に与えた影響を、福岡県のいくつかの学校の事例に焦点を当てながら、文献ならびに卒業生へのインタビュー調査をもとに明らかにするとともに、それをもとに男女共学制の歴史的意義を改めて検討することにある。

男女共学制に関する歴史的研究としては、すでに広瀬裕子「戦後学制改革期における男女共学化に関する一考察」(1982)、橋本紀子『男女共学制の史的 연구』(1992)、小山静子『戦後教育のジェンダー秩序』(2009)などの優れた先行研究が存在する。それらは、どれも日本にお

*人間学部児童発達学科

けるジェンダー平等教育の課題を明らかにしようとするものであるが、同時に、戦後教育改革の評価に関わる重要な論点を含んでいる。たとえば小山は、男女の性質の違いや性別役割を是認する考え方は、共学が実施されてもほとんど変化しておらず、むしろ共学には、異なる男女の特性を理解させる意義があるととらえられていたと指摘する。戦前において男女別学体制を正当化する論拠だった男女特性論は、戦後においては共学を意義づける役割を果たした。その意味で「男女共学論自体に、戦前からのジェンダー秩序が継承され、ジェンダーの非対称性が存在していた」というのである（小山他 2005, p.155-156）。

戦後男女共学制の歴史的意義を認めつつも、それが戦前からの男女特性論イデオロギーを乗り越えることができなかつたゆえに、むしろ共学制のもとで、男女の性別役割にもとづくジェンダー秩序を強化したという議論は、共学制に関わるジェンダー研究が制度論だけでなく、カリキュラムや方法といった内容論の次元に踏み込んでいくべきことを示唆した点で重要である。しかし同時に、教育史における戦前・戦後の不連続性よりもむしろ連続性を強調することで、戦後日本の民主化をめざした教育改革の意義を過小評価してしまう危険性をはらんでいるように思われる。

果たして、共学化という戦後のラディカルな制度変革は、人々のジェンダー平等意識を育てる上で結局は無力だったのだろうか。学校は、たとえ共学化したところで、男女特性論イデオロギーを強化し、旧来のジェンダー秩序を再生産する場でしかないのだろうか。たしかに制度改革が、日本人のジェンダー平等意識を育てるための十分条件とはなりえなかつたとしても、共学化が日本の生徒の意識にもたらした影響も看過してはならないのではないか。そこで本稿では、戦後の共学制発足期において、共学化が当時の生徒たちのジェンダー意識にどのようなインパクトを与えたかに注目したい。それは、戦後教育改革の意義、戦前/戦後教育の不連続性にあらためて光を当てることでもある。

第一章では、戦後の中等教育改革と男女共学化の歴史を簡単に振りかえる。第二章では、筆者が現地調査を行なった福岡県における共学化のプロセスを、福岡県立小倉高等学校ならびにその周辺校のケースを中心に紹介する。第三章では、福岡県立東筑高等学校の卒業生に対するインタビュー調査にもとづいて、男女共学化が当時の生徒たちにどのように受けとめられたかを明らかにする。そして最後に、以上の調査を踏まえ、戦後教育改革における男女共学制の意義を改めて検討したい。

1. 新制高等学校における男女共学化のプロセス

まず先行研究¹を参照しながら戦後新制高等学校における男女共学化の流れを振り返っておこう。戦後の新学制は、小中学校が1947年から、高等学校は1948年から実施された。施設不足のため、新制中学の多くは旧制中学校に付設され、その後、新制高校に旧制中学を併設するなどの措置がとられた。中等学校に1943年に入学した生徒はそのまま旧制中学を卒業し、新

制高校の3年時に編入された。1944年に入学した生徒は、中学校4年生を終了した後、新制高校2年生に編入された。1945年に入学した生徒は3年のとき、1947年新制中学発足にともない高校に併置された中学の生徒になり、1948年に新制高校に入学した。このように新制高校発足当時の生徒の進学プロセスとその構成は実に複雑であった。また新学制初期の中学校から高校への進学率は総じて低く、男子が55.03%、女子が38.01%に過ぎなかった。

その後、男女共学化が実施されるが、文部省の方針は各校の自由裁量であったため、全国一律に実施されたわけではなく、各地の占領軍地方軍政部担当官のスタンスによって大きな違いが生じた。共学化に比較的寛大であった東日本地域では漸進的に行なわれたが、西日本では軍政部の強力な指導により半ば強制的に実施された県が多い(図1)。1949年9月の文部省調査によれば、100%実施の県は14県、90%以上実施は5県であった。逆に30%以下は、1道5県であった。しかし厳密にみれば、担当する軍政部が同じでも、対応の異なる県もあり、占領軍の影響だけでなく、地域の教育関係者や保護者の意識や反応、学校の配置や校舎など様々な要因が、それぞれの地域の多様な共学の形態やプロセスを生み出したと言える(橋本1992, p.304)。

男女共学化は、学区制、総合制とともに、いわゆる「高校三原則」として実施されたが、共学化は、埼玉、群馬、栃木など一部の県を除いて全国的に定着し、今日に至る。それに対して学区制と総合制の原則は50年代以降多くの地域で崩れていく。

新制高校が共学化される仕方には、学校が共学化する際に単独で実施したか、他の学校と合併したかで次のようなタイプに分けられる²。

- ① [門戸開放型]: 従来の単独の別学校だった学校が異性の生徒に門戸を開放する。
- ② [同種学校同士の合併型]: 中学校と高等女学校、実業学校同士が合併して共学になる。
- ③ [異種学校の合併型]: 中学校や高等女学校と実業学校などが合併して共学になる。

これら共学化のタイプは、新制高校の「伝統」のあり様を規定し、生徒の男女比率、校歌・校訓・校章の戦前からの変更の仕方に影響を及ぼしている。後にみるように男子校系譜の学校では、旧制中学の「伝統」が維持され、女子校系譜ではむしろ共学化に対応した「伝統」の改変が行なわれる傾向がみられる。

では、筆者が現地調査を行なった福岡県に絞って共学化のプロセスをみていくことにしよう。福岡県では、1947年12月8日に「福岡県新制高等学校設置準備委員会」が設置され、準備委員会は、翌年1月24日に旧制中等学校をすべて新制高等学校に移行させることを妥当とする答申を知事に提出した。それを受けた県は、旧制中等学校をおおむねそのままの位置形態で新制高校に移行することとし、学区制・男女共学制・総合制は、1950年度の実施を目標とすることとした。この方針に従って、1948年4月1日発布の福岡県告示第52号「福岡県立新制高等学校の名称のこと」によって、旧制中等学校が新しい名称を冠した新制高校としてスタートした。

ところが同年11月、軍政部ライマン教育課主任の干渉があり、再三にわたる折衝の末、学

区制・男女共学制・総合制などの実施時期を一年繰り上げ、1949年度から実施することとなった。また福岡市などの一部地域を除き³、学区制にともなう高等学校の再編統合が方針化された。再編成については反対の声も強かったが、最終的に市町立16校、私立2校が県立に移管の上、県立98校を75校に統合し、普通科高校34校、職業科高校21校、総合制高校20校となり、1949年4月、学制発足以来初めての男女共学による始業式が行なわれた。

福岡県教育委員会は、男女共学に関しては、「実施後賛否の議論もあったが、…全体として比較的順調に定着した」と総括しているが、学区制については、地域や個人の利害もからみ、多くの問題を残したとしている。1949年度の普通科の新入生のうちの、約8%が学区外からの寄留生であり、小倉西高校の36%を筆頭に、10%を超える高校が8校を数えた。学区制に関しては、一部自由学区を設定するなど当初から柔軟な対応がとられ、1950年代後半に入ると小学区制から中学区制へと移行していく。

その後、男女共学に関しても、さすがに制度そのものを否定する議論はみられないが、その評価については次のような見方が強調されるようになる。

「男女平等を強調することがあたかも両性の特性を同等視することであるかのごとく錯覚におちいり、その個性や特性を抹殺しているむきはないであろうか。肉体的にも精神的にも相違があり、かつ最も両性の特徴が顕著に生育するという高校時代に男女共学制の学校において、いかなる面で女子本来の本分と任務を全うし得る教育がなされているであろうか。」（福岡県教育委員会1959, p.19）

共学化の弊害として、当初から議論されてきたのは、男女の学力差、風紀問題、男女の特性の喪失の三つであった。しかし実際には、学力差の問題は心配にあたらなかったこと、男女の風紀問題は共学とは無関係であることが経験的に明らかとなった。最後に残されたのが、共学化は「男らしさ」「女らしさ」を奪うという男女特性論からの批判であった。戦後定着した男女共学制の下で、いかにその「弊害」を克服するか。その手段として登場したのが、家庭科の女子のみ必修化である。必修化は、1960年の学習指導要領改訂では「原則として」であったが、1970年に「例外なし」とされた。戦後民主化は、日本社会における伝統的な性別役割分業を否定するまでには至らなかった。むしろ「男は仕事、女は家庭」という性別役割意識は、その後の高度経済成長を支えるイデオロギーとして強化されていったのである。

それでは共学化という制度改革は、当時の学校にどのような変化を及ぼし、生徒あるいは教師たちにどのように受けとめられたのか、ここでは、福岡県立小倉高校とそれに隣接する小倉西高校、そして東筑高校の事例を中心にみていくことにしよう。

2. 福岡県立小倉高等学校の事例（隣接する小倉西高校も含めて）

福岡県立小倉高等学校は、1908年（明治41年）小倉市（現北九州市小倉北区）に福岡県小倉中学校として開校された普通科進学校である。戦後学制改革によって1948年（昭和23年）

に県立小倉高等学校となり、翌1949年には男女共学が実施され、同時に名称も「小倉北高等学校」に変更された。しかしOBらの強い反対で1年後には「小倉高等学校」に戻った。さらにこの年、火事で校舎を消失した小倉市立小倉商業高等学校が統合された。

男女共学化の形態は、(1949年の時点では)旧制中学に学区域の女子を受け入れるかたちで実施される、いわゆる「門戸開放型」であった。(50年には小倉商業高校と統合するが、これも「合併」というより、「吸収」に近い)。生徒たちは、旧小倉市を3地区に分けて、男女を問わず、南部の一年生は小倉南高等学校(旧小倉園芸)、東部の一年生は小倉(北)高等学校、西地区は小倉西高等学校(旧小倉高女)に振り分けられた。そのため、西地区から小倉高校に通学していた男子生徒たちは、旧女学校の小倉西高校へ移り、逆に東地区の女子生徒たちは、男子校であった小倉高校に入学することになった。男女共学の一期生を出身校別にみると、男子は小倉高校併置中学262名、他の学校の併置中学58名、新制中学31名、女子は小倉西高校併置中学51名、他の学校の併置中学27名、新制中学5名、合計、男子351名、女子83名であった。

しかしながら、共学化されても「新制高校とは名のみで、実際は旧制小倉中学のままであった」(『創立百年史』)。校訓や「文武両道・質実剛健」の校是、そして校歌も、共学を契機に見直されることはなかった。ただ時代にそぐわないとして、歌詞の中の「殉国の意気」が「愛国の意気」に、「文武」が「文化」に変更されたにすぎない(平成9年、「文化」は「文武」に戻された)。結局、男子校の気質や文化はそのまま維持され、女子にはその文化に適應することが求められた。

他方、男子生徒を受け入れることになった小倉西高校では、「強く、正しく、美はしく」の校訓が、共学になっても残されたままであった。ここには伝統ある女子校の気質を失うまいとする学校側の強い意志を読み取ることができる。だが、校歌に関しては当初から男子生徒の反発が強かった。それでも最初学校側は時期尚早としてこれを受け入れなかった。その対応にも伝統女学校としてのプライドが見え隠れする。それは、例えば、小倉北高等学校から小倉高等学校への校名変更の要求が出された際、「むしろ歴史、伝統から言えば本校が古いのであるからして(創立は明治31年…筆者)、もしその校名が許されるならば本校こそ小倉高等学校と名乗るべきだとの意見も相当に強かった」(小倉西高等学校1958, p.29)という反応にもみることができる。しかしその後、1952年にいたって、生徒総会で新校歌作製の決議が行なわれ、翌年に現在の校歌が完成した。結局女子校系譜の学校では、男子校のように「旧制のままであった」というわけにはいかなかったのである。

新たに女子を迎え入れるに際し、小倉高校の男子生徒や教師たちは、その対応にかなり気を使ったようだ。女子には掃除をさせないことにしたが、あとで女子が率先してやるようになったという微笑ましいエピソードや男女疎遠なクラスの雰囲気や怒った担任が男子生徒たちを殴ったというエピソードも残っている。しかし旧男子校に入った女子生徒たちは意外にスムーズに男子校の文化に適應していったようだ。小倉高校四期生の手記に次のような記述がある。

「冬の教室の余りもの寒さに耐えかねて女生徒が休み時間に、男を真似て、教壇の上で馬乗りを始めたのには目を見張った。女性はみな『かぐや姫』か『乙姫様』だとばかり思っていたのだが、その逞しい姿には唖然呆然となった。」

女子が男子校の気質、文化に容易に適応していったのに対して、当時の男子生徒には旧女子校に入学することすら許容しがたいものであったようだ。それは、小倉高等学校『創立百年史』の次のような記述にも示されている。

「特に本校から旧小倉女子高の小倉西高校へ転校しなければならなくなった生徒三十三名のしょげかたはみるも哀れであった。…新学期の始まりと共に西高への転校生は一緒に送り届けられることとなった。…途中、愛宕神社の石段下で逆に西高から本校に転校する女生徒約四十名を連れた原野勇高教諭にバッタリ出会い、そこで生徒を交換した。到津への一本道を振りかえり振りかえり去っていった。別れのときには男の子の眼に涙が光っていた。」（小倉高等学校 2008, p.67-68）

旧男子校に入学する女子生徒の心境は、「期待と不安」という言葉に要約することができるだろう。男女平等の理念にもとづく共学化は、女子生徒にとっては、女性の地位や能力向上というポジティブな側面を持っていたと思われる。しかしながら旧女学校に通うことになった男子生徒の心境はより複雑であった。

さて、男子校であった小倉高等学校の方は、その後、男女共学による小倉高校での教育は予想以上に順調に進んでいったとされる。女子生徒の受け入れについて、『創立百年史』は次のように記している。

「いざ入学してみると、彼女たちの不安は全くの杞憂であった。設備は悪いが校内の空気は想像していたよりずっと温かかった。授業もわからぬところは男子が親切に教えてくれた。…はじめ本校に娘を入学させるのに多少警戒的であった世間の目も次第にその真価を認めるようになり、その後女生徒が競って本校の門をくぐるようになった。」（小倉高等学校 2008, p.68）

福岡県教育委員会がまとめた『福岡県教育百年史』も、「一部には危惧の念を抱くものもあり、実施後も賛否の議論もあったが、共学制は全体として比較的順調に推移したとすることができる」と総括している。小倉高校と同じく旧制中学から共学化した福岡県立八幡高等学校では、共学一期生に入学から三ヶ月後、アンケート調査を実施した。半分以上の生徒が共学は「よい」とし、「悪い」と答えた生徒は5分の1にすぎなかった（福岡県教育委員会 1949, p.35）。

ところが、共学化は順調に進んだとされる小倉高校でも、当初20～30%であった女子の入学者は、1950年代に入って学区制が揺らぐなかで減少していき、1957年には10%を切ってしまう。背景には、戦後の「逆コース」⁴と学校や社会における男女特性論の強まりなどが考えられる。さきほど紹介した「女性はみな『かぐや姫』か『乙姫様』だとばかり思っていた」男子生徒の当時の女子に対する「驚き」は、男子生徒に戦前に植え付けられてきた古い女性観に根本的な修正をもたらす可能性を持っていた。しかし他方でそれが、「共学化のせいで女性から女らしさが奪われた」とする共学化否定論を生み出すきっかけにもなったのである。

それでも 80 年代になると女子の比率は再び増加に転じ、20% を超えるようになる。その後女子生徒数は徐々に拡大し、2000 年代になるとほぼ半数を女子が占めるようになった(表 1)。具体的な調査には至っていないが、これだけの男女比率の変化は、男子校系譜の学校文化にも何らかの変容をもたらさざるを得ないだろう。

このような女子生徒増加の背景として、第一に、1985 年の女子差別撤廃条約批准、1999 年の男女共同参画社会基本法施行などによって社会における男女平等の実現に向けた流れが強まったこと、第二に、共学経験が自明となった団塊世代を親に持つ生徒たちが 80 年代に入って高校進学するようになったこと、などがあげられよう。

3. 福岡県立東筑高等学校の事例

北九州西部地域の普通科進学校である福岡県立東筑高等学校は、「異種学校合併型」の共学化校である。1949 年 4 月、福岡県立東筑高等学校(旧東筑中学校)、福岡県立折尾高等学校(旧折尾高等女学校)、八幡市立商業高等学校(旧八幡商業学校)の 3 校が統合され発足した。そのため学校規模が大きく、全日制の普通科、商業科に定時制を加えると、学級数 47、生徒数 2400 余名、教職員 100 余名にのぼった。名称としては、旧制中学の「東筑」が採用され、女学校の名称であった「折尾」は残らなかった。

校舎は旧東筑校舎に普通科を置き北校舎と呼び、旧折尾校舎に商業科を置いて南校舎と呼んだ。ただ施設設備の関係から、女子は普通科が北校舎、家庭科ならびに「家庭科」選択者が南校舎で学んだ。1953 年からは南校舎に一年、北校舎に二、三年を収容する措置がとられた。しかし現実的に教職員を南北に定着させることは不可能であった。その後、一つの学校に二つの校舎という不便な状況を解消するために分割案が検討され、ようやく 1956 年、南校舎を利用して、あらたに全日制商業科家庭科を持つ県立折尾高等学校が分離、発足した。

3 校の統合と同時に議論にのぼったのはまず校章の作成であった。美術担当教師たちにより、3 校統合による新たな出発を象徴した A 案、3 校の伝統的気風を象徴した B 案、東筑中学を中心にした C 案の三つのデザインが提案された。生徒の投票の結果、A 案が多く支持を集め、新制東筑高校の校章となった。1951 年 2 月に新校旗が作成されたが、それとともに校歌問題が浮上した。生徒への公募も行なわれたが、うまくいかず、最終的に翌年の 11 月、折口信夫氏作詞による新校歌が完成した。

このように東筑高校の場合、3 校統合というかたちをとったがゆえに、男女共学にふさわしい新たな校章、校旗、校歌の創作は、民主的なプロセスをある程度重視しながら順次行なわれていった。

次に、卒業生へのインタビュー調査をてがかりに、共学化が当時の高校生たちにどのように受けとめられていたかを探ってみよう。

東筑高校卒業生のインタビュー調査から

福岡県立東筑高等学校の卒業生へのインタビューは、2010年2月8日、東筑高校同窓会館で行なった。インタビューに協力いただいた東筑高等学校卒業生は、48期（1931年生まれ）の男性1名、50期（1933年生まれ）の女性2名・男性3名である。共学制発足時、48期生は新制高校3年生（旧制中学1年～4年・新制高校2年～3年）、50期生（旧制中学1年・併置中学2年～3年・新制高校1年～3年）は1年生であった。48期生は共学化の時点で3年生であったため、教室で女子と肩を並べることはなかった。50期生は高校入学とともに共学を体験することになった世代である。

以下、インタビューを通じて明らかになった共学化に対する当時の生徒たちの心境をまとめ、若干の考察を示す。

第一に、男子生徒の反応だが、異性の存在に強い関心をもちながらも、大きな戸惑いを感じるというアンビヴァレントな感情を抱えていたようだ。生まれて初めて共学を体験した当時の「戸惑い」をある男性は次のように語った。

「男女共学になったときは非常に戸惑いましたよね。学校に女が入ってくるなんて思ってもいなかったことだったから、小学生のときから男女別々に育ってきたんで、非常に戸惑った」。

このような「戸惑い」は、戦前の学校教育における徹底した男女分離の実態からすれば当然の反応であったと言えよう。男女生徒の分離対策は、学校や教育内容の分離だけでなく、通学路の分離、通学電車の分離にまで及んでいた。

「堀川をはさんで下の道と上の道があって、男子学生は堀川の下の道を通って女学校の学生は上の道を通る。…同じ道は通れなかったね。」

「電車でも分かれていましたね。前が男子で、後が女子というふうに。」

男子生徒の「戸惑い」は、たんに未体験の事態に直面したからというだけでなく、異性への強い関心の現れでもある。

50期の男性の一人は、「ただ高校1年のときの運動会とき、フォークダンスして初めて女性の手を握ったとき、それだけが強烈な印象だった」と当時を回想している。

また別の男性は、「運動会ときね、フォークダンスがあったんです。たまたま男の方が多いもんだから、私なんかあぶれたりしたんだけど、ほっとした反面羨ましいなという両方の考えが働きましたよ」と語った。

「ほっとした」という感情と「羨ましい」という感情、このアンビヴァレントに当時の男子生徒の心境がよくあらわれている。それに対して女子生徒の側は、話を聞く限り、男性の存在にそれほど強いインパクトを受けていないようであった。

そもそもフォークダンスは、戦後、日本社会に民主主義を広める道具とみなされ、普及していったものである。GHQと文部省は、各都道府県の教育委員会を通じて、フォークダンスの普及に努めた。学校現場では、学習指導要領によってフォークダンスの学習が浸透していった。1953年の小学校学習指導要領（試案）には、「リズムや身振りの遊びとリズム運動」の項目に「民

主的態度の育成」があり、フォークダンスの目的に「楽しみながら、新しい男女関係の基礎をつくる」とある。先のインタビューでの発言を聞いても、当時の児童生徒にとって、フォークダンスは「男女平等」というものを肌で実感できる教材であったことがわかる。

第二に、女子生徒の反応である。先ほど指摘したように、少なくともインタビューの範囲では、共学化に対して男子ほど戸惑いや抵抗を感じてはいなかったようである。ある女性は「東筑は、父親や兄弟も行った学校だから」と、その校名に親しみさえ感じていた。女子にとって男子と同じ学校に入るといことは、ある種のステップアップとしてとらえられたのかもしれない。

しかしそれが「ステップアップ」である以上、女子たちは男子との学力格差を実感させられることになる。

「たいへんだったのは英語よね。英語はすごいなと思いました。数学とかはそうでもなかった。英語は（高女の場合選択科目で）それまでは習ってなかった。」

男女で学習内容の異なる戦前のカリキュラムから、ほぼ同一のカリキュラムに変わるのだから、戦前の中等教育を経験してきた共学一期生にとって学力ギャップの存在は当然のことであった。そしてそれは共学化に反対する側の強力な論拠ともされてきた。しかし、彼女たちは、そのギャップを乗り越えようと努力の中で、男女平等という新たな社会への歩みを実感していたのかもしれない。

第三に、教師たちの対応がどうであったかに注目したい。インタビューからは、男女共学制度の理念を実質化しようと努める教師の姿も垣間見ることができた。

「とくに僕たちのクラス担任の先生は、絵の先生だったですけど、この先生は非常にそういう面では進んだ方でしたので、男・女、男・女と並べてみたり、極力男と女と接する機会を増やそうと努力していた先生だったんですけどね。それでもやはり男女仲よくすることはなかったですね。関心は人並み以上にあるんですよ。関心は非常にあるんですけど、それを実践できないという不器用さは皆ありましたね。」

福岡県立小倉高等学校の卒業生の手記にも同様の記述がみられる。

「出席簿及び席順は男女混合のアイウエオ順であったが、最後列七人の真ん中に男一人で、左右三人ずつの女生徒に挟まれた席割となった。…男子社会に生きて来た人間にとっては何ともドギマギするばかりであった。」

当時、「風紀の乱れ」を危惧し、男子生徒と女子生徒の交流を警戒する教師たちも少なくなかった。だが、それでも教師たちは、新たな男女共学制のもとで、「男女は、互に敬重し、協力し合わなければならない」とする（旧）教育基本法の理念の実現をめざしたのであろう。にもかかわらず、当の生徒たちは、これまで徹底した男女別学教育のなかで生きてきたのであり、異性と机を並べるとい経験は生まれて初めてのことであった。その意味で生徒たちの戸惑いも当然のことと言えよう。

それに対して、ある男性は、女子の存在にそれほど戸惑わなかったと語り、その理由を次の

ように説明した。

「私は小学校のときにですね、私たちのクラスだけ男女共学だったですからね。…同窓会をしたら、私たちは女性たちを知っているから比較的話がよく合った。ところが男性ばかりで同窓会に残ったもんだから、いまから女性は呼ぶな、ということになった。」

小学生時代にたまたま体験した「男女共学」が、その後、同世代の生徒とは異なった異性に対する意識を生み出していたのである。ここに改めて共学経験というものの教育的意義を見出すことができる。

本稿の冒頭でも紹介したように、戦後公教育における男女共学制の導入は、たんに女性を男性基準に合わせようとしただけであって、結局、それは男女特性論を乗り越えるものではなかったという批判がある。だがしかし、新たな男女共学制のもとで生徒たちが経験した期待と不安、戸惑いのなかには、彼ら彼女らが旧来の男女の関係性を乗り越えていく重要な契機が含まれていたと言えるのではないだろうか。

おわりに

共学化にともなう校歌や校訓などの見直しの動きは、女子校系譜の共学校には見られたが、男子校系譜の学校にはほとんど見られなかったと先に指摘した。しかし、だからといって旧男子校の伝統的な学校文化が、旧態依然のままであったかという点必ずしもそうではない。

小倉高校では、1950年、女子の生徒会活動への無関心や消極性が問題となり、女子独自の生徒会を発足させた。それも影響してか、その後1954年には、（その後統一された）生徒会の代表に初めて女子が選出されている。それは、学校の中に、男女は生徒自治においても同一の権利と責任を持つのであって、女子だからといって従属的立場に甘んじてはならないとする価値規範が生じていたことを示している。

福岡県立修猷館高校を対象に学校文化研究に取り組んだ社会学研究者の黄順姫（ファン・スンヒー）によれば、修猷館では、男女共学制の実施を契機に、教師や生徒たちの間で、「質実剛健、鉄拳制裁」の修猷館文化の転換、新たな学校文化の創出に向けた議論が進められていったという。たとえば、女子生徒たちが、「掃除は女がするものだ」という男子の差別的な態度に対して、生徒総会で異議を唱え、抵抗することで、掃除に関する新たなルールを決定していったプロセスを紹介し、そこに学校内で規範化された過去の文化を断ち切る転換点が見出されると論じている（黄順姫 1998, p.226-227）。

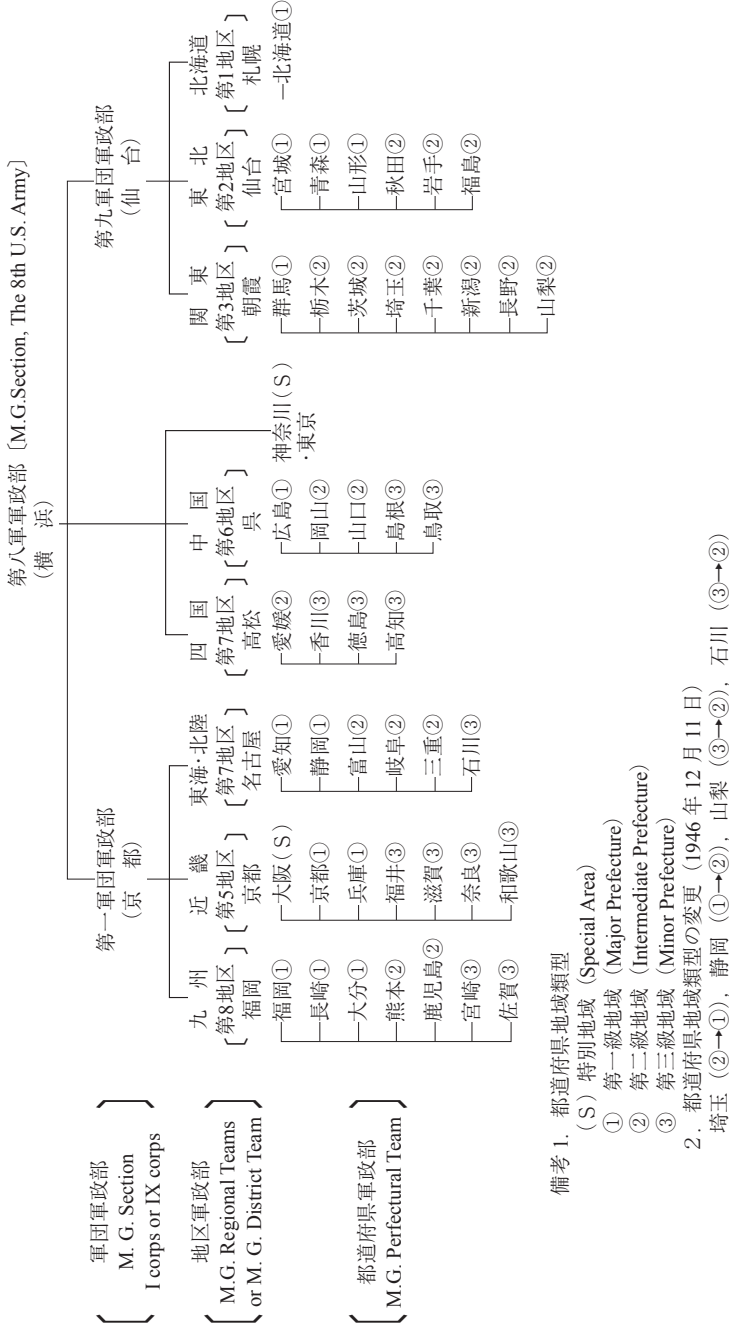
この掃除の事例は、小倉高校の場合と対象的で興味深い。小倉では、新たに入学した女子への配慮から、「女子の掃除免除」という措置が取られた。他方、修猷館では、「掃除は女子の仕事」と掃除をさぼる男子が現れた。両者は、男子の対応としては対称的だが、女子の特性や役割について旧来の価値観に囚われているという点では同一である。この価値観のゆらぎをもたらしたのは、学校や男子生徒の対応に対する女子生徒自身の応答であった。つまり、いっしょ

に掃除を始める、男子の差別的態度に異議申立てをするといった女子生徒の反応が、教師や男子生徒たちのジェンダー意識を揺るがし、その転換をせまったのである。そして、このような両性の出会いと葛藤を保障したのが男女共学という制度空間なのである。

戦後の共学化は、学校教育においてジェンダー平等の理念を実現していくための制度的空間を保障した。そのなかで生徒たちは、生身の異性と出会い、驚き、戸惑う。あるいはそのなかから両者の対話や葛藤が生まれる。それが、彼ら彼女らのジェンダー観を揺さぶり、新たな男女関係あるいはジェンダー秩序創出への可能性をひらく。当時の共学批判の最も根強い根拠は、それが「男らしさ、女らしさ」という男女の本性を奪うというものであった。しかし批判者の真の恐れの原因は、別学によって支えられてきた「男らしさ、女らしさ」の神話が、共学化を通じて崩されることにあったのではなかったか。

共学化の役割は、男女の特性を奪うことではなく、既存のジェンダー秩序を支えてきた幻想を暴くことにあった。その意味で、男女共学制の歴史的意義は、たとえ当時の大人たちが古いジェンダー秩序にとらわれたままであっても、男女生徒が同じ学校、同じ教室でともに学ぶ、そのこと自体にあったと言えるのではないだろうか。

図1 アメリカ第八軍軍政組織図



備考1. 都道府県地域類型

(S) 特別地域 (Special Area)

① 第一級地域 (Major Prefecture)

② 第二級地域 (Intermediate Prefecture)

③ 第三級地域 (Minor Prefecture)

2. 都道府県地域類型の変更 (1946年12月11日)

埼玉 (②→①), 静岡 (①→②), 山梨 (③→②), 石川 (③→②)

(注) 下記資料により作成した。

The 8th U. S. Army "Provisional Manual for Military Government in Japan" (1948)p.170~3 [[GHQ/SCAP Records] CAS (A) - 1104]

『外務省外交資料』A0051, A0095, A0097, A0093

出典：阿部彰『戦後地方教育制度成立過程の研究』風間書房, 1983年, pp.16~17

(橋本紀子『男女共学制の史的的研究』より)

表1 小倉高等学校（全日制）入学者数

年 度	高校期	入学者	学級数(普)	学級数(商)	男子	女子	女子占有率	男女数差
1946	昭和 21	1 期	320	6	320	0		320
1947	22	2 期	募集なし					0
1948	23	3 期	358	7	358	0		358
1949	24	4 期	434	8	347	87	20%	260
1950	25	5 期	424	9	297	127	30%	170
1951	26	6 期	439	8	329	110	25%	219
1952	27	7 期	441	8	379	62	14%	317
1953	28	8 期	377	8	321	56	15%	265
1954	29	9 期	430	8	364	66	15%	298
1955	30	10 期	439	8	379	60	14%	319
1956	31	11 期	435	8	378	57	13%	321
1957	32	12 期	438	8	405	33	8%	372
1958	33	13 期	433	8	399	34	8%	365
1959	34	14 期	436	8	384	52	12%	332
1960	35	15 期	435	8	405	30	7%	375
1961	36	16 期	419	8	377	42	10%	335
1962	37	17 期	490	9	452	38	8%	414
1963	38	18 期	552	10	495	57	10%	438
1964	39	19 期	616	11	548	68	11%	480
1965	40	20 期	614	11	562	52	8%	510
1966	41	21 期	546	10	468	58	11%	410
1967	42	22 期	520	10	438	82	16%	356
1968	43	23 期	479	10	394	85	18%	309
1969	44	24 期	467	10	389	78	17%	311
1970	45	25 期	455	10	393	62	14%	331
1971	46	26 期	449	10	374	75	17%	299
1972	47	27 期	446	10	383	63	14%	320
1973	48	28 期	450	10	367	83	18%	284
1974	49	29 期	450	10	357	93	21%	264
1975	50	30 期	449	10	366	83	18%	283
1976	51	31 期	450	10	356	94	21%	262
1977	52	32 期	450	10	375	75	17%	300
1978	53	33 期	450	10	373	77	17%	296
1979	54	34 期	450	10	373	77	17%	296
1980	55	35 期	450	10	364	85	19%	279
1981	56	36 期	450	10	345	105	23%	240
1982	57	37 期	440	10	337	103	23%	234
1983	58	38 期	450	10	341	109	24%	232
1984	59	39 期	450	10	337	113	25%	224
1985	60	40 期	450	10	337	113	25%	224
1986	61	41 期	450	10	322	108	24%	214
1987	62	42 期	450	10	347	103	23%	244
1988	63	43 期	520	11	382	135	26%	247
1989	平成 1	44 期	473	10	370	103	22%	267
1990	2	45 期	450	10	349	101	22%	248
1991	3	46 期	450	10	316	134	30%	182
1992	4	47 期	450	10	331	119	26%	212
1993	5	48 期	400	10	275	125	31%	150
1994	6	49 期	400	10	270	130	33%	140
1995	7	50 期	400	10	249	151	38%	98
1996	8	51 期	400	10	267	133	33%	134
1997	9	52 期	400	10	247	153	38%	94
1998	10	53 期	402	10	260	142	35%	118
1999	11	54 期	403	10	263	140	35%	123
2000	12	55 期	401	10	258	143	36%	115
2001	13	56 期	401	10	259	142	35%	117
2002	14	57 期	401	10	244	157	39%	87
2003	15	58 期	361	9	186	175	48%	11
2004	16	59 期	360	9	183	177	49%	6
2005	17	60 期	320	8	172	148	46%	24
2006	18	61 期	320	8	164	156	49%	8
2007	19	62 期	320	8	162	158	49%	4
2008	20	63 期	320	8	183	137	43%	46
2009	21	64 期	320	8	165	155	48%	10
2010	22	65 期	320	8	197	123	38%	74
合計			27,623		21,387	6,192		15,195

創立百年史準拠。

(小倉高等学校同窓会提供資料)

注

- ¹ 橋本紀子（1992）『男女共学制の史的研究』大月書店参照。
- ² これは本科研費研究において井上恵美子（フェリス女学院大学）によって提起されたタイプ分けを参考にしている。
- ³ 福岡市では、再編統合なしに、すべての中学校、高等女学校がそのまま共学に移行した。
- ⁴ 「逆コース」とは、1950年代に入り、教育の民主化路線が変更され、教育委員の公選制廃止をはじめ、再び教育の中央統制が強化されていくことをいう。その背景には、朝鮮戦争等を契機とするアメリカの対日政策の転換があったとされる。

引用文献

- 橋本紀子（1992）. 男女共学制の史的研究 大月書店 .
- 広瀬裕子（1982）. 戦後学制改革期における男女共学化に関する一考察, 教育学研究, 第49巻第3号 .
- 黄順姫（1998）. 日本のエリート高校－学校文化と同窓会の社会史－ 世界思想社 .
- 福岡県立小倉西高等学校（1958）. 創立六十年史 .
- 福岡県教育委員会（1959）. 教育福岡 No.113 .
- 福岡県教育委員会（1949）. 教育福岡 No.9 .
- 福岡県立小倉高等学校（2008） 創立百年史 .
- 福岡県教育委員会（1981） 福岡県教育百年史 .
- 福岡県立東筑高等学校（1998） 東筑百年史 .
- 小山静子（2009）. 戦後教育のジェンダー秩序 勁草書房 .
- 小山静子・菅井鳳展・山口和宏（2005）. 戦後公教育の成立－京都における中等教育 世織書房 .

（付記）本研究は、科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号21330183「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究～戦後男女共学制の総括～」研究代表者 橋本紀子（女子栄養大学）における共同研究の成果の一部である。 （2012.9.25 受稿, 2012.10.12 受理）